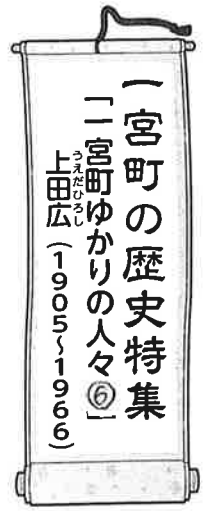


「広報文化財コラム」一宮の歴史特集」⑥

平成29年2月号



上田広は明治38年(1905)、長生郡豊栄村(現・長南町)に生まれ、本名は浜田昇といひます。鉄道省を卒業後、国鉄に勤務、大正14年(1925)ごろに坪田謙治(1890~1982、児童文学作家)らを中心とする創作朗読会に入会、以後プロレタリア文学などの影響も受けて、作家として活動していきます。昭和9年(1934)に筆名「上田広」を名乗りました。

昭和12年(1937)、日中戦争が勃発すると召集令状を受けて出征、中国戦線を転戦します。その陣中でも小説を執筆し続け、翌13年に「大陸」に掲載された『黄塵』などで一躍文名を高め、火野葦平(1907~60、小説家)、日比野十朗(1903~75、作家)らとともに「兵隊作家」と呼ばれました。特に『黄塵』は第8回(昭和13年)芥川賞の予選候補作にもノミネートされるほどでした。

その後昭和14年(1939)に帰還し、国鉄に復帰しますがその2年後には退職。太平洋戦争が開戦すると、今度は軍報道班員として、昭和18年

(1943)にはバターン半島(フィリピン)攻略戦に従軍、戦話集『緑の城』(昭和19年)を書きました。

一宮町の細田に住んでいたこともあって、昭和38年(1963)、合併10周年を記念した一宮町史編纂委員会の編集委員長となり、翌年3月に『一宮町史』を刊行しました。また同年、『日本国鉄百年誌』の編纂にも携わりました。

昭和41年(1966)に死去。昭和56年(1981)には文学碑「黄塵碑」が建てられました。また、居宅跡には平成26年(2014)に案内看板が設置されています。

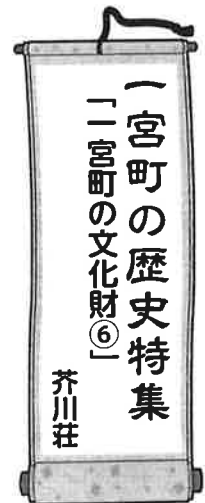


▲文学碑「黄塵碑」(一宮海岸広場)

【問合せ】

教育課 ☎(42)1416

平成29年3月号



芥川荘は一宮川の河口近く、一宮橋の畔にあり、旅館「一宮館」の離れとして使われていました。明治30年(1897)ごろの建築とみられています。

その名の由来は、芥川龍之介(1892~1927、小説家)が滞在したことに因みます。大正3年(1914)夏と大正5年(1916)夏の2回、芥川は一宮を訪れており、その2回目の訪問の時に滞在したのが一宮館でした。

大正5年8月17日、親友の久米正雄(1891~1952、小説家)と一宮海岸へ出かけた芥川は、友人の紹介で一宮館を訪れ、その離れに9月2日まで滞在しました。その場所が「芥川荘」と呼ばれている建物ということになります。

そこで芥川は恋人である塚本文(1900~68)に長い求婚の手紙を出しています。この年の12月に文と婚約、その2年後には結婚しました。

この他にも芥川は夏目漱石(1867~1916)らに一宮での

生活を書き送っています。またこの一宮での思い出は『微笑』(大正14年)、『海のほとり』(同上)、『曇気楼』(昭和2年)などの芥川の作品に綴られています。

平成13年(2001)、芥川荘はこの地方の伝統的な民家建築(茅葺屋根の寄棟造り)として認められ、国の登録有形文化財となりました。在りし日の、「東の大磯」と呼ばれていたころの一宮の風景を、そこでは感じることができます。



▲芥川荘。かつての一宮の風景が蘇ります。

【問合せ】

教育課 ☎(42)1416

※「芥川荘」を見学希望の方は、一宮館(☎(42)2127)までご連絡ください。